

(西暦) 2020 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

回復期大腿骨近位部骨折術後患者における入院時低アルブミン値と運動機能不良の併存が ADL の改善と在院日数へ及ぼす影響

学位の種類: 修士 (理学療法 学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 理学療法科学域

学修番号 19895702

氏名: 石井 健史

(指導教員名: 山田 拓実)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

[はじめに] 本邦における大腿骨近位部骨折 (以下: HF) は、増加の一途を辿り、2020 年には 22 万人、2030 年には 30 万人に達すると推測されている。またその機能は骨折前と比べ骨折後は 60% の患者において機能が低下すると報告されている。回復期リハビリテーション病棟 (以下: 回リハ) における、HF 患者の割合は増加傾向である。回リハは、2016 年度診療報酬改定により、より早期の Activities of Daily Living (以下: ADL) の改善だけでなく在院日数の短縮も求められるようになった。よって、ADL の改善および在院日数の短縮と双方に目を向けながら予後予測をしなければならない。ADL の改善および在院日数に影響する要因として、術後の運動機能不良と低栄養があげられる。临床上、低栄養と運動機能不良の併存した HF 患者に難渋する経験を持つ。しかし、ここ最近での報告では、低栄養の HF 患者の機能的な予後に関する報告が多く、低栄養と運動機能不良が併存している HF 患者の予後に関する報告はなされていない。低栄養、運動機能不良およびその併存の、HF 患者の ADL 改善と在院日数に対する影響を検証することは、理学療法に対する有用な知見となる。

[目的] 本研究の目的は、入院時低アルブミン値と運動機能不良の併存が HF 患者の ADL 改善と在院日数へ与える影響を後方視的な調査で明らかにすることとした。

[方法] 研究デザインは、後ろ向きコホート研究とした。対象は、2016 年 4 月~2020 年 9 月の期間に単一の回復期病棟に入院した大腿骨頸部骨折術後患者とした。骨折型は大腿骨頸部骨折、術式は大腿骨頭置換術とした。除外基準は、入院時運動 Functional Independence measure (以下: FIM) が 76 点以上のもの、入院時荷重制限があるもの、脳卒中の既往があるもの、入院中に容態の悪化を認め転院となったもの、術前から歩行困難なもの、入院時 Time Up and Go test (以下: TUG) の測定が実施できなかったものとした。アルブミン値 3.5g/dl 未満を低栄養、TUG24 秒以上を運動機能不良と定義した。統計解析は、従属変数を FIM 利得および在院日数、独立変数を低栄養の有無、運動機能不良の有無、低栄養と運動機能不良の交互作用項、共変量を年齢、性別、入院時の FIM とした重回帰分析を用いた。解析には R コマンダー (EZR version 1.27) を用いた。

[結果] データベースから 167 名が抽出され適格基準を満たした 61 名が解析の対象となった。対象者の平均年齢は、78.2±7.0 歳、性別は、女性が 42 名で男性が 19 名であった。統計解析の結果、FIM 利得および在院日数において低栄養の有無と年齢が有意な関連を認め、低栄養と運動機能不良の交互作用項においては関連を認めなかった。

[結論]

回復期大腿骨頸部骨折術後患者における FIM 利得および在院日数に影響を与える要因について交絡因子を考慮した解析をした。その結果として、入院時アルブミン値と年齢が有意に関連していた。入院時にアルブミン値が低く、年齢が高い HF 患者では、術後早期のリハビリテーションだけでなく、多職種を交えた食事療法を行い、栄養状態をコントロールしていく必要性が示唆された。